

# 第1章 吉賀町の概況

## 第1節 自然・地理的概況

吉賀町は、島根県の南西部に位置し、本庁舎は東経 131 度 56 分 10 秒、北緯 34 度 20 分 58 秒、標高 311.8m 地点、分庁舎は東経 131 度 52 分 13 秒、北緯 34 度 26 分 19 秒、標高 181.6m 地点に所在します。

本町は、西中国山地の脊梁地帯に位置し、総面積は 336.29K m<sup>2</sup>です。町土構成は、山林 92.2%、農地 3.0%、その他（河川・道路他）4.8%となっています。周辺部には、安蔵寺山や鈴ノ大谷山をはじめとする 1,000m 級の高峰が嶺を連ね、町内をほぼ南北に一級河川・高津川が貫流しており、水と緑に囲まれた農山村地域です。

旧六日市町地区は、高津川流域に沿って石西地方ではスケールの大きい河谷平野を有しています。そしてこの高津川に流れ込む各流域の河岸段丘に集落が形成されています。旧柿木村地区は、急峻な山々の間を河川が流れ、狭隘な谷底平野に農地と集落が位置するという特色をもっています。

日本に残る数少ない清流となった高津川は、県下第 3 位の幹川流路延長 81Km、流域面積 1,090K m<sup>2</sup>を誇り、ダムのない川でも有名です。良好な水質環境は水生生物の宝庫ともなっており、ゴギやヤマメ、オヤニラミやツガニ等、希少な淡水魚類が棲息しています。また最近は自然遡上が少なく放流が主体とはいえ高津川の鮎は良質で全国的にも知名度が高いです。近年、魚種も個体数も年々減少傾向にあります。国交省が行う水質調査において、令和 2 年度の BOD 数値は 0.5 で、「水質が最も良好な河川」と判定されています。

流域には、安蔵寺山を中心とした美しい山なみが連なり、広葉樹や岸ツツジ等が四季折々に色をそえる豊かな自然景観を有しています。高津川は太古の昔、瀬戸内海に流れ込む深谷川に河川上流部を奪われ（いわゆる河川争奪）、切頭された下流域は流水の減少により泥沼化された地域が残るとい、特異な地形を呈しています。また、水源（田野原地区の一本杉の下の湧水池）を特定できる珍しい一級河川としても有名です。

気象は、典型的な山陰型気候で、年間の平均気温は 14.7℃、年間降水量の平均は 2,000mm 前後と比較的多いほうです。また、冬季間の積雪も多く、地域によっては交通の途絶も年数回発生することもあります。

## 第2節 歴史的概況

旧六日市町は、古くから陰陽両道を結ぶ交通の要衝として発展し、江戸時代には津和野藩主吉見氏や亀井氏の参勤交代の際の第一日目の宿場町として栄えていました。

明治以前は津和野藩に属していましたが、明治4年の廃藩置県では浜田県に編入され、次いで明治9年に島根県、明治12年の郡制実施に伴い鹿足郡に属することとなりました。六日市町としての歴史は、昭和29年に六日市・朝倉・蔵木の3カ町村が合併し、つづいて昭和31年の七日市村の編入合併により、面積198.57k㎡、人口1万1千人の町として発足しました。

旧柿木村は、藩政時代津和野藩に属し、参勤交代の主要街道に集落を配し、藩主の食する御用米を生産する等、清らかな水と豊富な樹種を擁する山林からの林産特産物が地域の経済の主要な収入源でした。また、明治22年4月1日の町村制施行とともに発足した柿木村は、平成17年10月の合併まで、110余年にわたり行政区域を変えることなく続いた歴史をもつ、由緒ある村でした。

両町村は戦後の建築ブームによる住宅材の供給地域として潤った時期もありましたが、高度経済成長期に入り、高収入をめざしての向都離村現象や高学歴志向の高まりによる若者の都市部への人口流出により、急速な過疎化が生じました。

昭和58年3月には中国自動車道六日市ICが開通し、広域交通網の整備による地域経済の活性化も期待されたところですが、過疎化に歯止めをかけるだけの要因とはなりませんでした。昭和35年の国勢調査によると総人口13,876人でしたが、平成27年には6,374人へと減少しました。

そして、国から地方への権限移譲や規制緩和、国庫補助負担金や地方交付税の見直し等、厳しい自治体経営が迫られる中、平成17年10月1日に、柿木村と六日市町は対等合併を実現し、吉賀町として新たなまちづくりに向けてスタートしました。

### 第3節 社会的概況

本町の就業者人口は、平成27年の国勢調査によると、第1次産業従事者が585人、第2次産業従事者が862人、第3次産業従事者が1,836人となっています。比率をみると、第1次産業従事者が17.8%、第2次産業従事者が26.3%、第3次産業従事者が55.9%です。

昭和50年からの産業の推移をみると、かつて基幹産業であった農林業は時代の変遷と共に衰退し、製造業や建設業へと移行しました。そして、第2次産業も建設業の衰退等近年減少へと転じ、第3次産業への移行が顕著であります。第3次産業が進展してきた主要因は、医療・福祉サービス関連業や情報通信産業の進展があげられます。

総じていえば、小規模で零細な第1次産業では生計が困難であり、収入の増加を企図して第2次・第3次産業へ就業形態が変化してきたものといえ、特に旧六日市町においては、企業誘致等も進められこの傾向が顕著であったといえます。

一方、旧柿木村は旧六日市町と比べ雇用の場が少なく、自給的生活の中から有機農業を興し、現在においても第1次産業が大きな役割を担っているという特徴があります。

今後、町の発展のためには、吉賀町の地域特性を活かしながら、均衡のとれた産業振興施策を展開していくことが望ましいといえます。